

TR-I-0317

ATR対話データベース用
英語形態素解析作業基準
Morphological Analysis Specifications
for the ATR Dialogue Database

菊井玄一郎 森田千帆* 浦谷則好
Gen-ichiro KIKUI Chiho MORITA Noriyoshi URATANI

1993.3

概要

ATRでは目的指向の電話対話及びキーボード対話を対象とした対話データベースの構築を進めてきた。このデータベースは日本語と英語のバイリンガルデータベースであり、英語部分については単語区切りや区切られた単語に対する品詞属性などの形態素解析情報を付与している。本報告ではこの形態素解析作業において、特に問題となる箇所を重点的に記述する。

ATR 自動翻訳電話研究所
ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

© (株)ATR 自動翻訳電話研究所 1993
© 1993 by ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

* 株式会社 東洋情報システム
TOYO Information Systems

目次

1	はじめに	1
2	解析作業の概要	2
3	単語の切り出しと標準表現の復元	4
3.1	単語の切り出し	4
3.2	複合語の認定	5
3.3	単語 I D	6
3.4	標準表現の復元	7
4	名詞	9
4.1	名詞	9
4.2	固有名詞	15
4.3	数名詞	20
5	代名詞	21
5.1	代名詞	21
5.2	疑問代名詞	24
5.3	関係代名詞	25
5.4	再帰代名詞	26
6	動詞・助動詞	27
6.1	動詞	27
6.2	助動詞	32
6.3	b e 動詞	35
6.4	H A V E 動詞	38
7	形容詞	41
7.1	形容詞	41
7.2	数形容詞	44
7.3	疑問形容詞	46
7.4	関係形容詞	47
7.5	数量詞	48
8	限定詞	50
8.1	限定詞	50
9	副詞	52
9.1	副詞	52
9.2	疑問副詞	54
9.3	関係副詞	55

10 接続詞	56
10.1 等位接続詞	56
10.2 副詞節従属接続詞	58
10.3 名詞節従属接続詞	59
11 その他	60
11.1 仮主語	60
11.2 THERE	61
11.3 否定詞	62
11.4 前置詞	63
11.5 TO不定詞	64
11.6 間投詞	65
11.7 文中の終止符	66
11.8 コンマ	67
11.9 終止符	68
11.10記号	69
11.11その他	71
11.12個別要件	73
12 付録	78

1 はじめに

ATR 自動翻訳電話研究所では目的指向の対話に関する言語データベースの作成を行なって来た。この言語データベースは日本語と英語のバイリンガルデータベースとなっており、英語の部分に対しては 1990 年度より形態素解析作業が行なわれている。本作業基準はこの英語形態素解析作業を行なう際に特に問題となる箇所を重点的に記述したものである¹。

まず、2 章で形態素解析作業の概要について述べる。次に、3 章で単語の切り出しについて説明し、4 章以降で英語の品詞別に問題となる言語現象とその扱いについて述べる。

[注意]

本作業基準書に特に指定されていない事項については「小学館プログレッシブ英和中辞典 第 2 版 (以下プログレッシブ)」に準拠する。また、プログレッシブでカバーしきれていない語については「大修館書店 ジーニアス英和辞典」の解釈を参考にする。

[参考] 形態素付与作業の進め方と作業基準書

実際の英語形態素解析作業は「半自動的」に行なわれた。すなわち、計算機を用いて一応の形態素解析結果を求め、これを人手で後編集する方式をとった。本基準書はこの作業における「人手による後処理」に関するマニュアルという側面も持つ。

なお、作業で用いた形態素解析プログラムは (株) シャープの英日翻訳システムの形態素解析モジュールに若干の前後処理を加えたものであるが、本基準書の記述は英語形態素解析において一般的に問題となる箇所が多く含まれている。たとえば、University of Pennsylvania の tagging (の後処理) に関する資料でコメントされている言語現象の一部は本基準書でも言及されている。

¹英語形態素解析のための品詞分類等の仕様は言語処理研究室の長谷川氏、データベース研究室の江原氏によって作成されたものである。この仕様はデータベースの一貫性という観点から現在のデータベースにおいても基本的に踏襲している。

2 解析作業の概要

解析作業は、文ごとに区切られた英語テキストファイルを元に表1のようなレコードの並びからなる形態素属性ファイルを作成することにある。

表 1: 英語形態素解析データフォーマット

FIELD 1	FIELD 2	FIELD 3	FIELD 4	FIELD 5	FIELD 6	FIELD 7	FIELD 8	FIELD 9	FIELD 10
会話ID	発話ID	文ID	単語1ID	単語2ID	出現表現	標準表現	品詞	活用属性	備考

ここで、英語テキストファイルも形態素属性ファイルも1ファイルが1会話に対応する。各フィールドに入るべきデータは表2の通りである。

(詳しいフォーマットについては表3参照)

表 2: 英語形態素解析フィールドフォーマット

FIELD	属性	説明	データ型
FIELD1	会話ID	言語データベース管理票によって指定されたID	数値
FIELD2	発話ID	発話者が変わる毎に増分しているID	数値
FIELD3	文ID	文が変わる毎に増分しているID	数値
FIELD4	単語1ID	それぞれの単語に付けられるID (同一の複合語を構成する語は同一のIDとなる。) 第3.3節参照	数値
FIELD5	単語2ID	それぞれの単語に付けられるID (複合語を構成する各語を1語とみなす)	数値
FIELD6	出現表現	解析前のテキストファイル中に現れた形	文字列
FIELD7	標準表現	3.4の「標準表現の復元」参照	文字列
FIELD8	品詞	付録の表6の品詞体系参照	文字列
FIELD9	活用属性	活用属性1は付録の表7参照 活用属性2は付録の表8参照	文字列
FIELD10	備考	必要に応じて記載する	文字列

表 3: レコード形式

No.	フィールド名	データ型	データ長 (byte)	区切り記号
1	会話 ID	文字列	6	_ (0X5f)
2	発話 ID	文字列	6	_ (0X5f)
3	文 ID	文字列	6	_ (0X5f)
4	単語 ID1	文字列	6	_ (0X5f)
5	単語 ID2	文字列	6	_ (0X5f)
6	出現単語	文字列	不定	_ (0X5f)
7	標準表現	文字列	不定	_ (0X5f)
8	品詞属性	文字列	2	_ (0X5f)
9	活用属性	文字列	2	_ (0X5f)
10	コメント	文字列	不定 (max 80)	CRLF (0x0d0a)

FIELD10 の備考欄については 2 バイトコードの使用を認めるが、その他のフィールドにおいては 1 バイトコードのみとする。

なお、FIELD8 ~ 10 は実際の解析結果ファイルではコードで与えられるが、本基準書では「名詞」「単数」などで表す。

本基準書では主にフィールド 6 ~ 9 の各フィールドについて述べる。

3 単語の切り出しと標準表現の復元

3.1 単語の切り出し

- ① スペースで区切られる単位を単語とする。
- ② スペースで区切られていない語が「,」「-」「=」などのような区切り記号を含む場合、これらの区切り記号とその他の部分とを別々の語として分割する。
⇒ なお、場合によっては、それらの記号を区切り記号とみなさない場合もある。〈詳しくは品詞別の記述を参照のこと〉
- ③ アポストロフィ（'）が短縮形のために使われている場合、アポストロフィの前で分割する。

	出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2	
I'll	I	I	代名詞	主格	単数	← 単語 1
	'll	will	助動詞	現在形	なし	← 単語 2

- ④ アポストロフィを使った短縮形の内、「not」が短縮されている場合は以下のように分割する。

	出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2	
Don't	Do	do	助動詞	現在形	なし	← 単語 1
	n't	not	否定詞	なし	なし	← 単語 2
Can't	Ca	can	助動詞	現在形	なし	← 単語 1
	n't	not	否定詞	なし	なし	← 単語 2

3.2 複合語の認定

複合語とは前の定義においては複数語の並びとなるが、(全体で) 1語扱いした方が良いものであり、「構成する各語の並びが統合的に不規則であったり、全体の意味が各語の意味から推測できないものをいう」

具体的には次のようなものがある。

① 複数語からなる固有名詞

- ◇ Hong Kong
- ◇ United States of America

出現	出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2	
Hong Kong	Hong	Hong	固有名詞	なし	なし	← 単語1
	Kong	Kong	固有名詞	なし	なし	← 単語2

② ハイフンでつながれた造語

- e x) audio-visual
- e x) example-based

出現	出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2	
audio-visual	audio	audio	形容詞	その他	なし	← 単語1
	-	-	記号	なし	なし	← 単語2
	visual	visual	形容詞	その他	なし	← 単語3

3.3 単語 I D

まず単語 I D 2 から説明する。単語 I D 2 は複合語を構成する各語を独立した 1 語とみなして会話の先頭を 1 0 0 として増分 1 0 0 で与えた I D である。

単語 I D 1 は複合語以外は単語 I D 2 と同一の番号を付与し、複合語を構成する各語に関してはこの複合語の全ての語に 先頭語の単語 I D 2 を付与する。以下の図 1 参照。

単語 I D 1	単語 I D 2	出現表現	標準表現	品詞	活用属性
023800	023800	I	I	12	Hd
023900	023900	want	want	20	B-
024000	024000	to	to	51	-
024100	024100	check	check	20	A-
024200	024200	out	out	40	Z-
024300	024300	which	which	41	-
024400	024400	is	be	22	Bc
024500	024500	the	the	34	-
024600	024600	cheapest	cheap	30	G-
024700	024700	way	way	10	Zd
024800	024800	to	to	51	-
024900	024900	travel	travel	20	A-
025000	025000	to	to	50	-
025100	025100	Hong	Hong	16	Zt
025100	025200	Kong	Kong	16	Zt
025300	025300	?	?	83	-

図 1: 単語 I D 付与の例

3.4 標準表現の復元

単語の標準表現とは実際の出現形から語形変化などの形態的变化を取り去った形である。

① 代名詞を含む短縮形の復元

	出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
It's	It	it	代名詞	主格	単数
	's	be	be 動詞	現在形	単数
	It	it	代名詞	主格	単数
	's	have	have 動詞	現在形	3 人称単数
I'd	I	I	代名詞	主格	単数
	'd	will	助動詞	過去形	なし
	I	I	代名詞	主格	単数
	'd	would	助動詞	現在形	なし
	I	I	代名詞	主格	単数
	'd	have	have 動詞	過去形	1 人称単数

「I'd」の例

- ◇ I'd attend the meeting but.... (→ I would attend the meeting)
- ◇ I'd like to attend the meeting. (→ I would like to attend the meeting)
- ◇ I'd been to Japan. (→ I had been to Japan)

② 否定詞「not」を含む短縮形の標準表現の復元。

	出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
didn't	did	do	助動詞	過去形	なし
	n't	not	否定詞	なし	なし
can't	ca	can	助動詞	現在形	なし
	n't	not	否定詞	なし	なし
won't	wo	will	助動詞	現在形	なし
	n't	not	否定詞	なし	なし

「can't」と「won't」の分割方法は少々不自然であるが、他の否定詞「not」を含む短縮形の復元との整合性を保つために例外的に認める。

- ③ 名詞の標準表現は「単数形」とする。ただし、「means」などのように、その形のまま、辞書中で見出し語となっているものについては「mean」にする必要はない。
- ④ 固有名詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ⑤ 比較級、最上級になっている数量詞、副詞の標準表現は「原級」とする。
- ⑥ 代名詞の標準表現は主格とする。

⑦ 「would」や「should」が以下のような用法で用いられる時の標準表現は出現表現と同じとする。＜詳しくは、助動詞を参照＞

- would・・・「丁寧」「過去の習慣」、「過去の意志」、「願望」
- should・・・「義務」、「当然」、「that...should文」、「疑問詞の後」

4 名詞

4.1 名詞

名詞は「固有名詞」<<固有名詞の定義については固有名詞の覧を参照>>を除く「普通名詞」、「集合名詞」、「物質名詞」、「抽象名詞」すべてを指す。

4.1.1 標準表現の復元

- ◆ 名詞の標準表現は基本的には複数形のものも単数形になおし、小文字で表記する。ただし、曜日、月の標準表現は特別に短縮形を使わずに、頭1文字を大文字にする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
Dec.	December	名詞	その他	その他
february	February	名詞	その他	その他
sunday	Sunday	名詞	その他	その他

- ◆ A4、OHP、VHS、TVなどの、小文字にしてしまうと意味の通じなくなってしまう語については大文字の標準表現を認める。
- ◆ 形が複数形であっても、次に続く動詞やbe動詞によって単数形扱いとなっており、辞書中に見出し語として存在している場合の標準表現は大文字を小文字になおして複数形のまま表記する。
- ◆ 表記はフルスペルとする。
- ◆ 頭字語は「出現表現＝標準表現」を認める

◇ R&D

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
R&D	R&D	名詞	その他	その他

4.1.2 活用属性1

単独で出現する名詞の活用属性1は「所有格」と「その他」のみとする。それ以外の活用属性1は認めない。また、複合語を構成する名詞の活用属性1については「なし」とする。

4.1.3 活用属性2

単独で出現する名詞の活用属性2は「単数」「複数」「その他」のみとする。それ以外の活用属性2は認めない。また、複合語を構成する名詞の活用属性1については「なし」とする。

- ① 抽象名詞の活用属性2は「その他」とする。

② 集合名詞に該当する単語が個々の成員をさしている場合は活用属性2を「複数」にする。逆に、まとまった単位としてみる場合には「単数」にする。

◆ My audience were ~ (audience = 複数)

◆ The audience at the theater was enormous. (audience = 単数)

③ 物質名詞と普通名詞

◆ 単語の前に「a」「an」といった限定詞がついている場合の活用属性2は「単数」とする。

◆ 名詞の語尾に「-s」「-es」がついている場合の活用属性2は「複数」とする。ただし、その語が形容詞的になっている場合の活用属性2は「その他」にする。

④ 加算名詞

◆ 文章の前後関係から複数と判断できるものの活用属性2は「複数」とする。

◆ 単数形が慣用的表現以外の場所で現れた時で、「単数」か「その他」かの判断ができない時の活用属性2は「単数」とする。

⑤ 不加算名詞

◆ 冠詞「a」「an」を伴わず、複数形にもなっていない場合の活用属性2は「その他」とする。

⑥ 加算、不加算が特定できないもの

◆ 「much」「(a)little」が前についていたり、「some」（「何かがある」という意味の場合は別）が前についていて複数形になっていない場合の活用属性2は「その他」にする。

◆ 「in the morning」「in the evening」等の「morning」「evening」の活用属性2は「その他」にする。

◆ 「time」は「...回、度」の意味以外の時の活用属性2は「その他」にする。

◆ 「English」「Japanese」等が「...語」の意味の時の活用属性2は「その他」にする。

◆ 慣用句（又は慣用的なもの）の中で用いられる無冠詞の名詞の活用属性2は「その他」にする。

◇ take part in

◇ in practice

◇ in fact

◇ in detail

◇ at night

◆ また、慣用的表現に類する表現で、前置詞の後に冠詞なしで加算名詞の単数形がでてくる時も、「その他」とする。

◆ 特に以下のような手段を現す「by + 単数名詞」の名詞の活用属性2は、「その他」として扱う。

- ◇ by mail
- ◇ by credit card
- ◇ by bank transfer

- ◆ 「south」「left」等の方位を現す単語の活用属性2は「その他」にする。
- ◆ 単数形でも複数扱いになる可能性のある単語については、文脈から判断するか、又はその名詞が主語になっている場合には次に続く動詞（be動詞の区別、3単現の「-s」「-es」がつくか否か）によって活用属性2（単数/複数）を判断する。
「three fish」のような場合も、形は単数形であるが、「複数」とする。

the following is の場合	the following are の場合
following = 単数 is = 3人称単数	following = 複数 are = 3人称複数
most of it is の場合	most of letters are の場合
most = 単数	most = 複数
the rest of the money の場合	the rest of us の場合
rest = 単数 (money = uncountable)	rest = 複数 us = 複数
he is a Japanese の場合	the Japanese are の場合
Japanese = 単数	Japanese = 複数

- ◆ 形が複数形でも次に続いている動詞・be動詞によって単数形扱いされている場合の活用属性2は「単数形とする」。
- ◆ 2語以上の名詞連続の場合、前の名詞が形容詞的になって、次に続く名詞を修飾している場合の活用属性2は「その他」にする。

conference office の場合	cherry blossom season の場合
conference = その他 office = 単数	cherry = その他 blossom = その他 season = 単数

又、「-s」、「-es」がついて複数形になっている場合でもその名詞が形容詞的に機能する場合は活用属性2を「その他」とする。

- ◇ ten days trip

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
days	days	名詞	その他	その他
trip	trip	名詞	その他	単数

◆ 「part」「half」「kind」

<「part」「half」「kind」+ of + 名詞>の場合、名詞の活用属性2は以下のようにする。

ただし、「much」「some」「(a) little」等が前につく時は「その他」とする。

- 単数・・・続く名詞が加算名詞の単数形、不加算名詞、又は不加算名詞と判断できる表現の時。複数の名詞でもひとまとめに考えられるものは単数扱いにする。

◇ half of an apple

◇ what kind of food...

◇ half of the money

- 複数・・・続く名詞が加算名詞の複数形の時、又は、「of」以降の名詞が人、物の数を示す時。名詞の単数でも、個々の成員を考えられるものは複数扱いにする。

◇ a large part of the books

- その他・・・「part」が立場や役割という意味を持つ時の活用属性2は「その他」にする。

◇ ...for our part...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
part	part	名詞	その他	その他

◆ 「most」が名詞として使われる時は、後に続く名詞の数にあわせて活用属性2（単数／複数）を決定する。

◇ ...most of all participants will be japanese...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
most	most	名詞	その他	複数

◆ 「more」が名詞として使われる時は、後に続く名詞合わせて活用属性2を決定する。

◇ I would like to know more about American companies .

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
more	more	名詞	その他	単数

◇ More of them are at home than are abroad.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
More	more	名詞	その他	単数

◆ 時間「xx:yy」

時間を表す xx 時 yy 分に相当する「xx:yy」の活用属性2は「単数」とする。

4.1.4 複合語の扱いについて

- ① つながれた語の全体の意味が各々の構成語の意味をそのまま合成したような場合は、分割して記述する。
- ② 複合語が、「接頭辞」「接尾辞」などの時や、全体の意味が個々の構成語の意味からは合成できないと判断できる時は、ひとまとめにして記述する。

◆ audio-visual equipments

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
audio	audio	形容詞	その他	なし
-	-	記号	なし	なし
visual	visual	形容詞	その他	なし
equipments	equipment	名詞	その他	複数

◆ a multi-slide projector

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
a	a	限定詞	なし	なし
multi-slide	multi-slide	名詞	その他	その他
projector	projector	名詞	その他	単数

4.1.5 その他

- ① 「pension's owner」
「pension's owner」の「pension's」は以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
pension's	pension	名詞	所有格	単数

「's」のついた名詞の後に名詞がなく、独立所有格のようにになっている場合は以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
pension's	pension	名詞	その他	単数

また、「courts' owner」の場合は以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
courts'	court	名詞	所有格	複数

② 「etc.」、「et cetra」について。

「etc.」や「et cetra」の品詞は「名詞」とする。又、「et cetra」は分割せず1つの単語として扱う。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
etc.	etc.	名詞	その他	その他
et cetra	et cetra	名詞	その他	その他

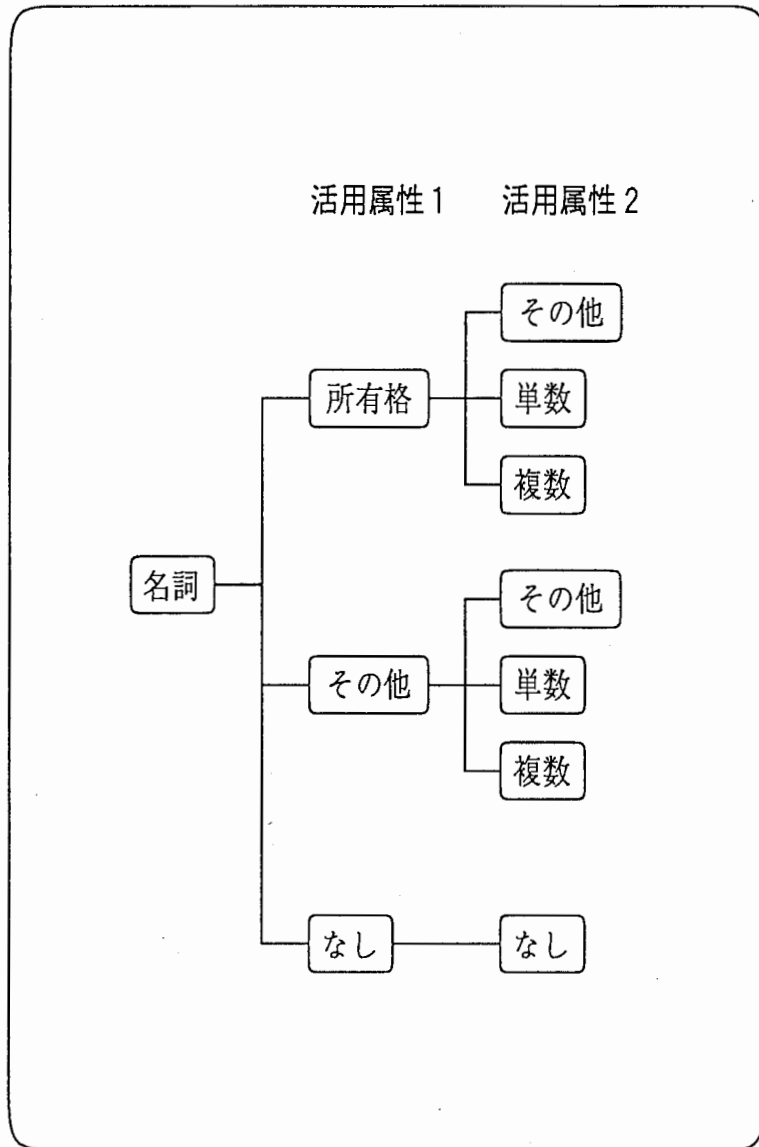


図 2: 名詞の活用属性パターン

4.2 固有名詞

固有名詞は、特定の地名、人名、社名、会議名、ツアー名などの名詞を指す。基本的には頭1文字が大文字の場合を固有名詞とするが、ツアー名などが引用符などで囲まれていて、1つの名詞として成立している場合は、たとえ小文字始まりの語であっても固有名詞とする。また、ひとまとまりで固有名詞と考えられるものは、後ろの単語の先頭が小文字であっても固有名詞とする。

4.2.1 標準表現の復元

- ◆ 固有名詞はの標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合はそのまま大文字始まりで記述する。
- ◆ 複数形のものであっても、そのままの形で記述する。
- ◆ 固有名詞複合語に「-'s」がついている場合は、出現表現、標準表現とも「-'s」を付けたままの形で記述する。ただし、複合語ではなく単独で出現している場合は「-'s」を取る。

◇ An American Telephone Service Company's Japan Office the Womens Program.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
Company's	Company's	固有名詞	なし	なし
Women's	Women's	固有名詞	なし	なし

4.2.2 活用属性1

単独で出現する固有名詞の活用属性は、「その他」又は「所有格」とする。ただし、複合語を構成している語に対しては「なし」とする。

4.2.3 活用属性2

複合語を構成している語は「なし」とする。単独で出現する固有名詞は基本的には「単数」とする。ただし、「-s, -es」が付いていたり、文脈によって「複数」と判断できる場合は「複数」とする。また、単独で出現する場合でも地名や国名などについては「その他」とする。

4.2.4 複合語の扱いについて

- 国名やツアー名やハイフンで連結されている地名等の複合語は単語間のスペースのあるなしにかかわらず、意味的に無理が起こらない限りはできるだけ1単語ずつ分割する。「Hong Kong」、「United States of America」、「suginami-ku」等を分割したものの品詞は、すべて「固有名詞(propn)」とし、活用属性は「なし_なし」にする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2	単語 id 1	単語 id 2
Hong	Hong	固有名詞	なし	なし	100	100
Kong	Kong	固有名詞	なし	なし	100	110
United	United	固有名詞	なし	なし	100	100
States	States	固有名詞	なし	なし	100	110
of	of	固有名詞	なし	なし	100	120
America	America	固有名詞	なし	なし	100	130
suginami	suginami	固有名詞	なし	なし	100	100
-	-	固有名詞	なし	なし	100	110
ku	ku	固有名詞	なし	なし	100	120

複合語は分割した後も、単語 ID 1 に同一の番号を付け、単語 ID 2 を連番で付ける

- 「tama ku」などのように単語の間がスペースの場合、「tama」と「ku」は分割して処理する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
tama	tama	固有名詞	なし	なし
ku	ku	固有名詞	なし	なし

- 「osaka-jo」や「shin-osaka」など、分割してしまうと意味がおかしくなってしまう単語の場合は、複合語とはせず、1単語とする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
osaka-jo	osaka-jo	固有名詞	その他	単数
shin-osaka	shin-osaka	固有名詞	その他	単数

又、「Shin-osaka Station」のように複合語の固有名詞の中にハイフンの混じっている場合は以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
Shin-osaka	Shin-osaka	固有名詞	なし	なし
Station	Station	固有名詞	なし	なし

4.2.5 その他

- ① 複合語と認められない単数形の固有名詞の活用属性は「その他_単数」とする。もしその語に「-s」「-es」が付いているなら「複数」として扱う。この時、標準表現は出現表現と同じ形（「-s」付きのまま）にしておく。
- ② 名前などを伝えるためにゆっくり話した固有名詞が音節毎にハイフンでつながれているときは、バラバラにせずひとつにまとめて、品詞を「固有名詞」と記述する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
Ya-ma-mo-to	Ya-ma-mo-to	固有名詞	その他	単数

- ③ 大文字で始まる単体の単語で前に「the」がある時は品詞は「普通名詞」とし、「the」がない時は「固有名詞」とする。

◇ the President

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
the	the	限定詞	なし	なし
President	president	名詞	その他	単数

◇ President

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
President	President	固有名詞	その他	単数

◇ the Sun

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
the	the	限定詞	なし	なし
Sun	sun	名詞	その他	単数

◇ Sun

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
Sun	Sun	固有名詞	その他	単数

- ◇ 「the U.S.」や「the Hilton」は、単独の固有名詞に限定詞がついていて普通名詞の条件に当てはまってしまうが、明らかに国名や社名なので「固有名詞」として以下のように処理する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
the	the	限定詞	なし	なし
U.S.	U.S.	固有名詞	その他	その他

- ④ 引用符のダブルクォーテーションで囲まれた固有名詞の前におかれた「the」は固有名詞とはせず通常と同じく「限定詞」とする。

◇ the “Taiwan Highlight 5 days tour”

- ⑤ 複合の固有名詞に「the」が付いた場合、その「the」を複合の固有名詞の一部として処理する。

◇ “The Twin 21 Building and Business Park are...”

- ⑥ 「the +先頭が大文字+前置詞+先頭が大文字」のパターンで全体としていつの意味を持つものは固有名詞とする。

◇ 「the Department of Physics」等の学会名は固有名詞とする。

◇ 「the Univercity of California at Los Angeles」(大学名)

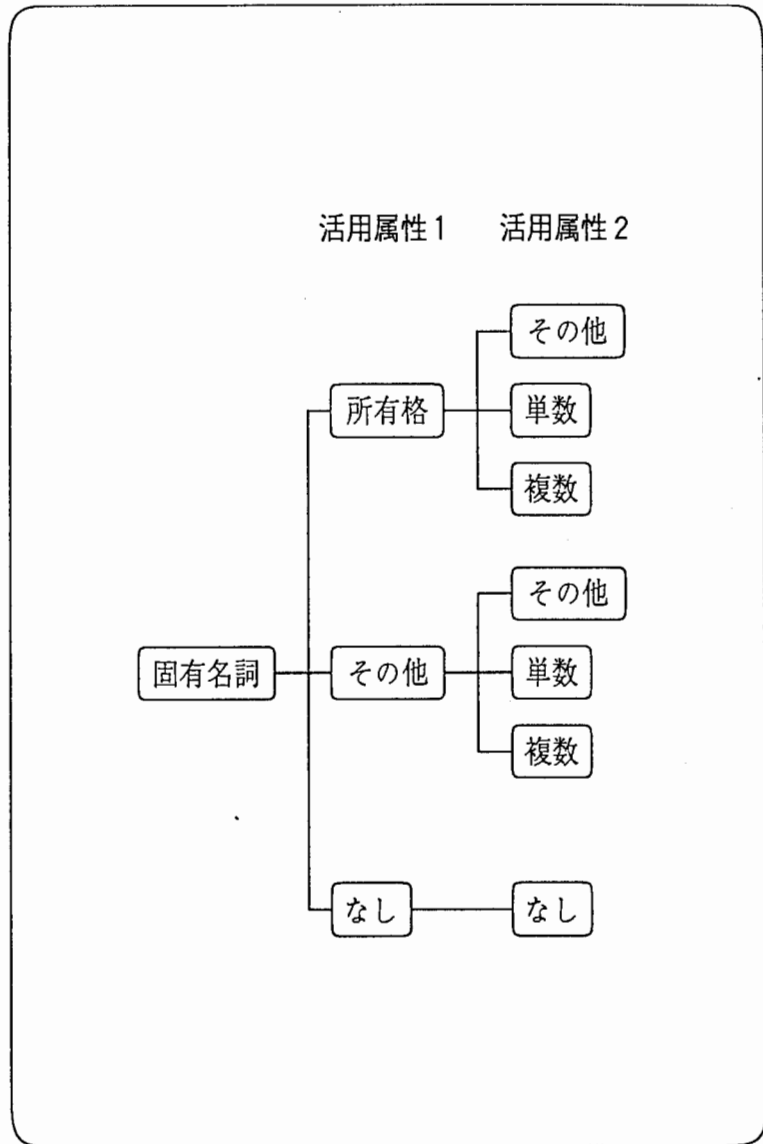


図 3: 固有名詞の活用属性パターン

4.3 数名詞

数名詞とは数詞及び序数詞が名詞的働きをしている場合にこの品詞をつける。「two tickets」や「5,000 dollar」などのように後ろの単語に形容詞的にかかっている場合は数形容詞とし、数名詞としては認めない。

4.3.1 標準表現の復元

- ◆ 数詞の標準表現は基本的には出現表現と同じとし、大文字は小文字になおす。
- ◆ 序数詞の標準表現は以下の表のようにする。

表 4: 序数詞の標準表現

表層表現	標準表現
1st ~ 20th	アルファベットで表記する。
first ~ twenntyth	アルファベットで表記する。
21st ~	数字 + st,nd,rd,th
twenty first ~	数字 + st,nd,rd,th

4.3.2 活用属性 1

数名詞における活用属性 1 は「なし」のみとする。それ以外の活用属性は認めない。

4.3.3 活用属性 2

数名詞における活用属性 2 は「なし」のみとする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

4.3.4 その他

- “at 6 a.m.” は以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
6	6	数名詞	なし	なし
a.m.	a.m.	副詞	その他	なし

- 「10時に」という意味の時の “at 10” の “10” は数名詞とする。

5 代名詞

5.1 代名詞

ここでいう代名詞とは表5に記載する「人称代名詞」「所有名詞」や「this(thses)」「that(those)」「such」などに代表される「指示代名詞」、「some」「any」「one」「all」「both」「each」などに代表される「不定代名詞」などをさす。ただし、指示代名詞の「I think so.」の「so」は副詞とし、不定代名詞の「some」や「any」「both」などが数量を表して後に続く名詞を修飾している場合は「数量詞」とし、代名詞とは認めない。また、「some」「any」「every」「no」に、-thing、-body、-oneなどが付属しているものは代名詞として認める。

5.1.1 標準表現の復元

- ◆ 「指示代名詞」、「不定代名詞」の標準表現は出現表現と同じとする。ただし、大文字始まりの場合は小文字になおす。
- ◆ 「some」、「any」、「every」、「no」に -thing、-body、-one がついているものは、不定代名詞と同じ扱いで、標準表現は出現表現と同じとする。こちらも大文字始まりの場合は、小文字になおす。
- ◆ 「人称代名詞」、「所有代名詞」の標準表現は以下にあげる表のとおりとする。

表 5: 人称代名詞と所有代名詞

		人称代名詞			所有代名詞
活用属性 1	標準表現	主格	所有格	目的格	所有代名詞形
1 人称 (単数)	I	I	my	me	mine
1 人称 (複数)	we	we	our	us	ours
2 人称 (単複)	you	you	your	you	yours
2 人称 (複数)	you	you	your	you	yours
3 人称 (単数)	he	he	his	him	his
3 人称 (単数)	she	she	her	her	hers
3 人称 (単数)	it	it	its	it	-
3 人称 (複数)	they	they	their	them	theirs

5.1.2 活用属性 1

代名詞における活用属性 1 は「主格」、「目的格」、「所有格」、「所有代名詞形」の 4 つのみとする。

- ◆ 人称代名詞

主格	I	we	you	he	she	it	they
所有格	my	our	your	his	her	its	their
目的格	me	our	your	him	her	it	them
所有代名詞形	mine	ours	yours	his	hers	-	theirs

- ◆ 「some」、「any」、「every」、「no」に -thing、-body、-one がついているものは、「主格」と「目的格」のみとする。

5.1.3 活用属性 2

代名詞における活用属性 2 は「単数」、「複数」のみとする。それ以外の活用属性 2 は、認めない。また、「some」、「any」、「every」、などの付いた語についての活用属性 2 は単数扱いとする。

5.1.4 その他

- ① 「this, that, any, one few, other...」が動詞や前置詞に対する格となりうる場合は代名詞として扱う。
- ② 「one」「nothing」は以下のような場合、「代名詞」として扱う。

◇ ... which is one of the sponsoring ...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
one	one	代名詞	主格	単数

◇ It's nothing to worry about!

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
nothing	nothing	代名詞	主格	単数

上記のような代名詞が主格補語としての文法機能を担っている場合、「補格」を格要素としていないので「主格」として処理する。

- ③ 「those」「these」が代名詞として使われている時は、標準表現は「that」「this」とし、活用属性 2 は「複数」とする。
- ④ 申込者 (Questioner) が事務局 (the Secretariat) を指して「you」を使うが、その場合の活用属性 2 は「単数」と統一する。

◇ Have you sent me an application form yet?

- ⑤ 「from you」の「you」のように前置詞の目的語として機能する場合、動詞の「目的格」でなくても活用属性 1 に「目的格」と記述する。
- ⑥ 「Prepare your name card and such」の「such」は「～など」という意味で、ここでは「your name card」と同じと考えて以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
such	such	代名詞	目的格	単数

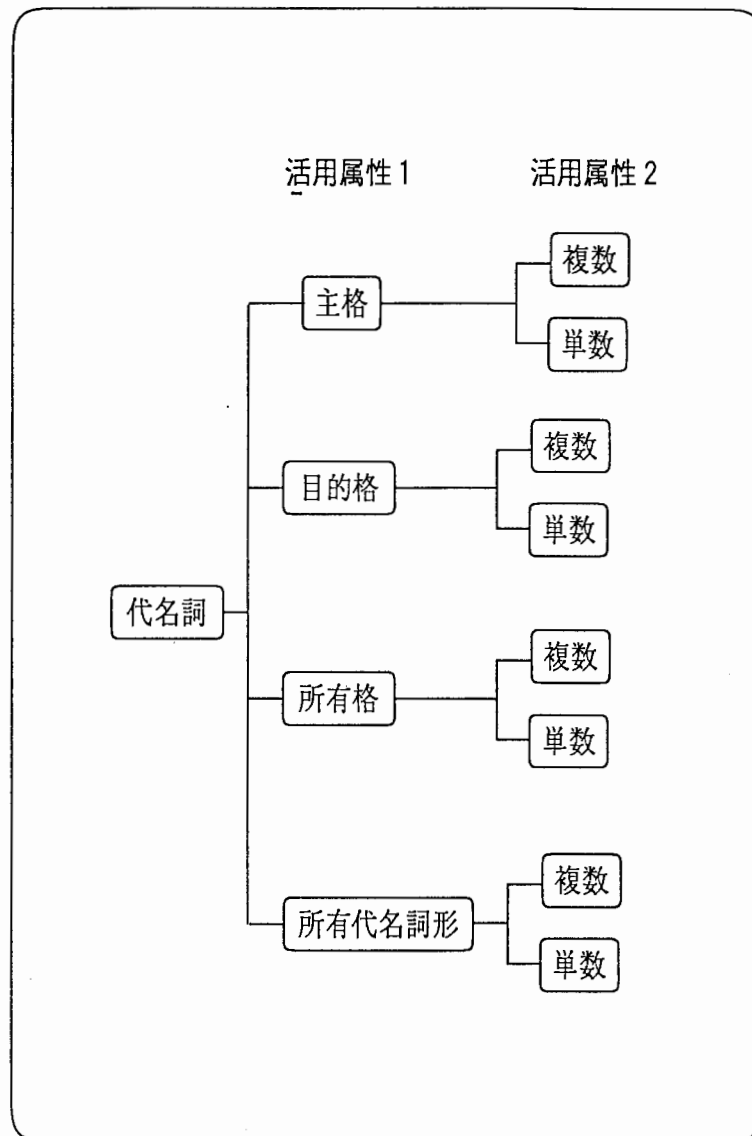


図 4: 代名詞活用属性パターン

5.2 疑問代名詞

疑問詞「who」、「whom」、「what」、「which」が疑問文の中で名詞の働きをする時、これを「疑問代名詞」とする。

「whom」は「Whom ～？」で目的格について質問している場合に限って疑問代名詞として認める。それ以外は関係代名詞とする。

5.2.1 標準表現の復元

- ◆ 標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字で始まっている場合は小文字になおす。

5.2.2 活用属性1

疑問代名詞における活用属性1はすべて「なし」とする。それ以外の活用属性1は認めない。

5.2.3 活用属性2

疑問代名詞における活用属性2はすべて「なし」とする。それ以外の活用属性2は認めない。

5.2.4 その他

- ① 「tell me what is special about it」の「what」は「疑問代名詞」とする。
- ② 「what to do」「who to talk to」などのようにしてTo不定詞が続く「what」「who」は「疑問代名詞」とする。
ただし、「where to go」「how to do」「when to do」などの「where」「how」「when」は「疑問副詞」とする。
- ③ 疑問代名詞の「whom」は活用属性1、2がどちらも「なし」となるので「出現表現＝標準表現」とする。

5.3 関係代名詞

先行詞を修飾する節を導く「who」「whose」「whom」「which」「that」「as」「but」を「関係代名詞」とする。

場合によっては、先行詞が省略されていることがあるが、これも「関係代名詞」とする。

また、「what」は、「～こと」、「～もの」の意味の時は「先行詞+関係代名詞」の働きをするので、疑問代名詞とはせずに、「関係代名詞」とする。

5.3.1 標準表現の復元

- ◆ 標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は小文字になおす。

5.3.2 活用属性 1

関係代名詞の活用属性 1 は「主格」、「所有格」、「目的格」のみとする。それ以外の活用属性は認めない。

- ◆ 活用属性 1 の表

主格	所有格	目的格
who	whose	whom
which	whose (which)	which
that	-	that
what	-	what

5.3.3 活用属性 2

疑問代名詞における活用属性 2 はすべて「なし」とする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

5.3.4 その他

- ① 「The fee cannot be refunded after the 10th, as is stated in program.」の「as」は「関係代名詞」として認める。
- ② 「There is no rule but has some exceptions」の「but」は「関係代名詞」として認める。

5.4 再帰代名詞

「myself」、「himself」、「herself」、「itself」、「yourself」、「ourselves」、「themselves」などのように代名詞の後ろに「-self」「-selves」が付いたものを再帰代名詞とする。

5.4.1 標準表現の復元

◆ 再帰代名詞は「出現表現＝標準表現」とする。

5.4.2 活用属性 1

再帰代名詞における活用属性 1 は「なし」のみとする。それ以外の活用属性 1 は認めない。

5.4.3 活用属性 2

再帰代名詞における活用属性 2 は「なし」のみとする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

6 動詞・助動詞

6.1 動詞

一般に動詞呼ばれるものを対象とする。「-ing」が付いて動名詞化しているものも含む。ただし助動詞やBE動詞はここに含まれない。

6.1.1 標準表現の復元

◆ 動詞の標準表現は「原型」とする。

6.1.2 活用属性 1

動詞の活用属性 1 は「原型」、「現在形」、「過去形」、「過去分詞形」、「現在分詞形」とする。それ以外の活用属性 1 は認めない。

以下の条件にあてはまる動詞の活用属性 1 は「原形」とする。

- 命令形の場合。
- 助動詞の後。（助動詞が省略されている場合も含む）
demand, suggest, recommend 等の動詞に導かれる従属節の主用言には putative の “should” がつくが、米英語などでは、省略可能なので接続の主要源を原形とする。
- to 不定詞の後。
- please の後。
- 原形不定詞。

6.1.3 活用属性 2

- 活用属性 1 が原型の時の活用属性 2 は「なし」のみとする。
- 活用属性 1 が現在形の時の活用属性 2 は「なし」又は「3人称単数」のみとし、他の活用属性 2 は認めない。
- 活用属性 1 が過去形の時の活用属性 2 は「なし」のみとする。
- 活用属性 1 が過去分詞形の時の活用属性 2 は「完了形」、「形容」、「受動」のみとする。
- 活用属性 1 が現在分詞の時の活用属性 2 は「進行」、「形容」、「動名詞」とする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

6.1.4 その他

- ① 現在分詞が形容詞的名詞を修飾するときは属性 2 を「形容」とするが、動詞を副詞的に修飾する時には、「進行」とする。

- ◇ we sent announcement using member lists...
「using」は動詞「sent」にかかっている。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
using	use	動詞	現在分詞	進行

- ◇ Don't bother faxing.
Let's go skiing at Daisen.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
faixing	fax	動詞	現在分詞	進行
skiing	ski	動詞	現在分詞	進行

② 動詞以外にも「状況説明」等の補語となり形容詞等を修飾する。

- ◇ I'm busy getting the house redecorated.
◇ We're fortunate having Aunt Mary as a basy sitter.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
getting	get	動詞	現在分詞	進行
having	have	動詞	現在分詞	進行

③ 以下の他動詞は、目的語に動名詞をとり形からは「現在分詞_ 進行」と紛らわしい場合がある。(enjoy, mind, start, try)

- ◇ I started working on time.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
working	work	動詞	現在分詞	動名詞

④ 以下の表現では、先行する名詞に対して同格の機能を果たす動名詞と解釈する必要があり形からは「現在分詞_ 形容」と紛らわしい場合がある。

- ◇ Do you have any experience putting a tour like this?"

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
putting	put	動詞	現在分詞	動名詞

⑤ 動詞の構文型より分詞の活用属性 2 の値が決定されているもの

- ◇ 「have/get 目的語 過去分詞」の場合、「受動」とする。

◇ 「知覚動詞 目的語 現在分詞」の場合、「進行」とする。

⑥ 分詞構文の分詞の活用属性2について。

現在分詞は「進行」とし過去分詞は、「受身」とする。

⑦ 「let」の扱いは次の通りとする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
let	let	動詞	その他	なし

ただし「let's」の場合は、「let's _ let's _ 副詞_ その他_ なし」

(→ 基本的には分割すべきだが、特別に分割せずに1単語として処理する。)

⑧ 「excuse me」

「excuse」の品詞が「動詞」の場合、活用属性1は「原形」とし、活用属性2は「なし」とする。

⑨ 群動詞の場合

群動詞は〈動詞 + 副詞〉〈動詞 + 前置詞〉の形で、全体で1つの動詞と同じ働きを持つものである。

原則的には辞書の記述に従うが、辞書に記述がない場合には〈動詞 + 副詞〉とする。

look out	look out	動詞 副詞
look at	look at	動詞 前置詞
ran away	ran away	動詞 副詞

⑩ 動詞の口語表現

「want to」の口語表現である「wanna」を動詞とし以下の記述とする。また後続の用言は原型をとるのでその旨記述する。

◇ I wanna go.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
I	I	代名詞	主格	単数
wanna	wanna	動詞	現在形	なし
go	go	動詞	原型	なし

◇ He wanna go.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
He	he	代名詞	主格	単数
wanna	wanna	動詞	現在形	3人称単数
go	go	動詞	原型	なし

「going to」の口語表現である「gonna」を動詞とし以下の記述とする。また後続の用言は原型をとるのでその旨記述する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
gonna	gonna	動詞	現在分詞	進行

命令文以外の動詞の原形で始まる口語表現の「See you, then.」のような文章では、「I will」が省略されていると考え先頭の動詞を以下の記述とする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
see	see	動詞	原形	なし

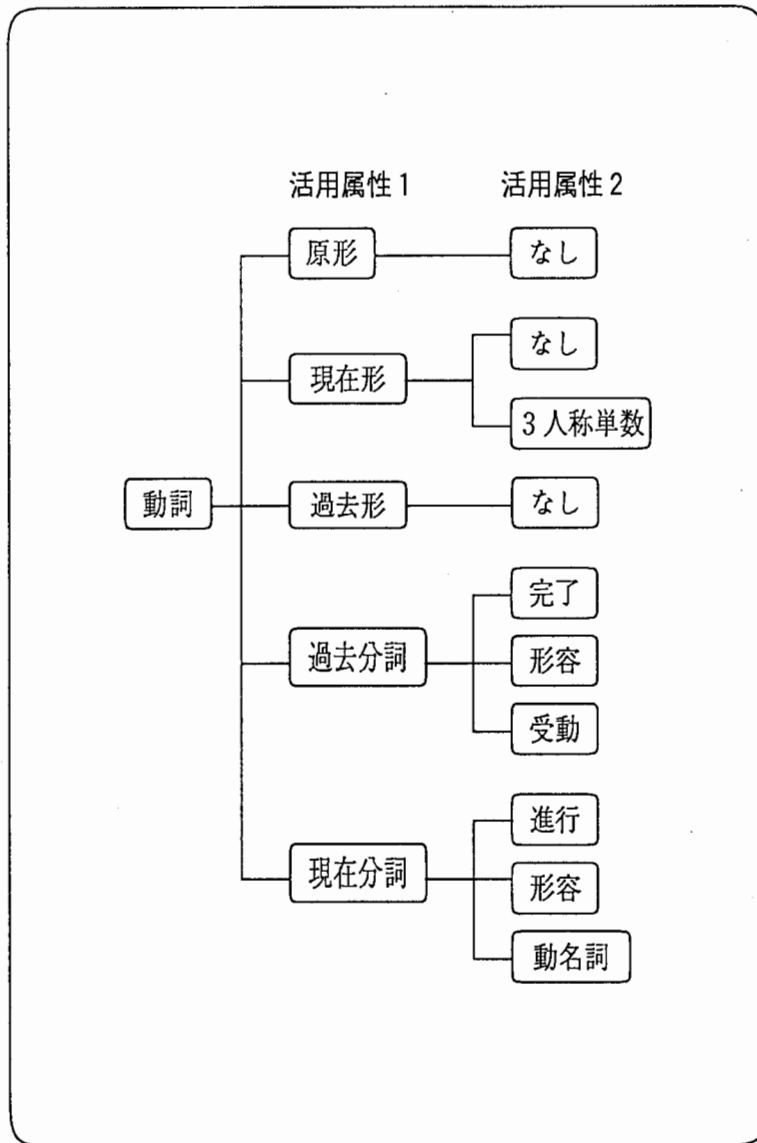


図 5: 動詞の活用属性パターン

6.2 助動詞

「can」、「could」、「may」、「might」、「must」、「will」、「would」、「shall」、「should」、「do」、「does」、「did」を助動詞とする。ただし、「do」などのように、動詞、助動詞両方が存在するものについては文体や内容によって動詞か助動詞かを判断する。

また、「be going to」、「have to」、「be able to」、「ought to」、「used to」など、2語以上で構成されている助動詞は助動詞としては認めず、それぞれ動詞、前置詞、BE動詞、to不定詞のtoに分割する。ただし、「need」、や「dare」が1語で助動詞としての働きをしている時は助動詞として認める。

6.2.1 標準表現の復元

- ◆ 助動詞の標準表現は動詞と同じく原型とする。
- ◆ 大文字始まりの場合は小文字になおす。
- ◆ 「cannot」は「can」と「not」に分割し、それぞれの標準表現は「can」及び、「not」とする。
- ◆ 「won't」や「can't」は分割の関係上、出現表現が「wo」と「n't」、「ca」と「n't」になってしまうが、この場合の「wo」や「ca」の標準表現は「will」および「can」とする。

◇ 「Can't」

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
ca	can	助動詞	現在形	なし
n't	not	否定詞	なし	なし

◇ 「won't」

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
wo	will	助動詞	現在形	なし
n't	not	否定詞	なし	なし

◆ アポストロフィのついた短縮形の復元

◇ I'd have bought it if I had had a chance.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
I	I 代名詞	主格	単数	
'd	will	助動詞	過去形	なし

◇ I'd be happy to help you.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
I	I	代名詞	主格	単数
'd	would	助動詞	現在形	なし

◇ I'd a beautiful house at that time.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
I	I	代名詞	主格	単数
'd	have	have 動詞	過去形	なし

◇ I'd done my work by the time he came home.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
I	I	代名詞	主格	単数
'd	have	have 動詞	過去形	なし

6.2.2 活用属性 1

助動詞の活用属性 1 は「現在形」と「過去形」のみとする。それ以外の活用属性 1 は認めない。

6.2.3 活用属性 2

助動詞の活用属性 2 は「なし」とする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

6.2.4 その他

① 仮定法主節の「would」

仮定法の表現に於て助動詞の形だけでは、過去形であるが意味的に現在の場合の活用属性は、以下のように現在形として記述する。

◇ If he were, he would ...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
would	would	助動詞	現在形	なし

② 特別な助動詞

「would」「should」「could」「might」が以下のような用法で用いられる時の「標準表現」は「出現表現」と同じとする。

◇ would・・・「丁寧」、「過去の習慣」、「過去の意志」、「願望」

- I would like to ～.
- Would you ～.
- If I were a member, I would attend the conference.
- We didn't go to there, because the air plane would not departure.
- I would ～.(would = used to)
- I would ～.(would = wish)

◇ should・・・「義務」、「当然」、「that...should.文」、「疑問詞の後」

- What should ～.
- This should be done by this afternoon.
- It's necessary that he should the no answer.
- It's odd that he should do that.

◇ might・・・「未来の事態の可能性」、「may よりも弱い可能性」

- Might I come in?
- You might help me.
- you might pass me the newspaper please.
- He told me that he might come.

6.3 b e 動詞

「be」、「is」、「am」、「are」、「was」、「were」、「been」、「being」などは b e 動詞とする。

また、名詞化した「being」についても b e 動詞とする。

6.3.1 標準表現の復元

- ◆ b e 動詞の標準表現は原型の「be」とする。主語にくっついて「's」、「'm」となっていたものの標準表現も「be」とする。

6.3.2 活用属性 1

b e 動詞の活用属性 1 は原型、「現在形」、「過去形」、「過去分詞形」、「現在分詞形」とする。それ以外の活用属性 1 は認めない。

6.3.3 活用属性 2

- 活用属性 1 が原型の時の活用属性 2 は「なし」のみとする。
- 活用属性 2 が現在形の時の活用属性 2 は「1 人称単数」、「1 人称複数」、「2 人称単数」、「2 人称複数」、「3 人称単数」、「3 人称複数」とする。他の活用属性 2 は認めない。
- 活用属性 1 が過去形の時の活用属性 2 は「1 人称単数」、「1 人称複数」、「2 人称単数」、「2 人称複数」、「3 人称単数」、「3 人称複数」とする。それ以外の活用属性 2 は認めない。
- 活用属性 1 が過去分詞形の時の活用属性 2 は「完了形」、「形容」、「受動」のみとする。
- 活用属性 1 が現在分詞の時の活用属性 2 は「進行」、「形容」、「動名詞」とする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

6.3.4 その他

① b e 動詞活用属性

	be	is	am	are	was	were	been	being
活用属性 1	原形	現在形	現在形	現在形	過去形	過去形	過去分詞形	現在分詞形
活用属性 2	なし	3 人称単数	1 人称単数	1 人称複数 2 人称単数 2 人称複数 3 人称複数	1 人称単数 3 人称複数	1 人称複数 2 人称単数 2 人称複数 3 人称複数	完了 形容	形容 進行 動名詞

② アポストロフィのついた短縮形の復元

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
It	it	代名詞	主格	単数
's	be	be 動詞	現在形	単数
It	it	代名詞	主格	単数
's	have	have 動詞	現在形	3人称単数

③ 仮定法条件節における b e 動詞の活用属性について。

仮定法の b e 動詞の活用属性は、主語の人称・数と同じにする。

◇ I wish I were...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
were	be	B E 動詞	過去	1人称単数

◇ I wish it were...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
were	be	B E 動詞	過去	3人称単数

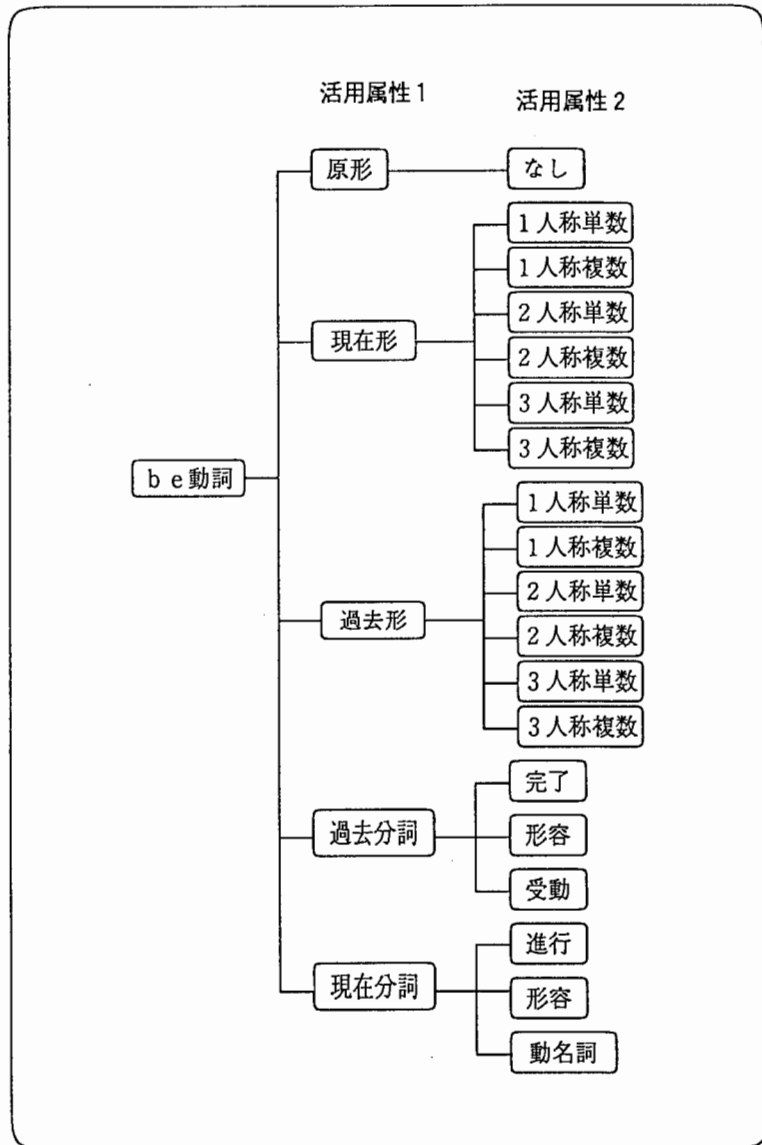


図 6: b e 動詞の活用属性パターン

6.4 H A V E 動詞

「have」が「持つ」という意味無しで、以下のような働きをしている場合、これを「HAVE動詞」とする。

- 「have + 過去分詞」の形で完了形となる「have」。
- 助動詞「have to」を構成する「have」。
- 「have」が「have not (haven't)」の形であらわれている時。

*動詞の「have」は「I'd (I had)」や「He's (He has)」のように短縮することはできないので、主語に付いて短縮されている「have」は完了形、または助動詞「have to」の「have」と見ることができるので自動的に「HAVE動詞」となる。

6.4.1 標準表現の復元

- ◆ HAVE動詞の標準表現は「have」とする。

6.4.2 活用属性1

HAVE動詞の活用属性1は基本的には「原形」、「現在形」、「過去形」のみとする。ただし、例外として以下のような分詞句において「have」が後ろに過去分詞形の動詞、BE動詞を従えている場合は「現在分詞形」を認める。

- I doubt having written that I'd attend the banquet.
- I feel much better, having talked to you.
- I'm also responsible for not having given you a sufficient explanation.
- I got a call telling me that it was possible to make reservation and having been engrossed in something else I just said "yes" without thinking.
- I am sure the Tachikawa branch , having only been open for three months, so they gave you that kind of answer.

6.4.3 活用属性2

HAVE動詞の活用属性2は「have」「had」は「なし」とする。ただし、「has」の活用属性2は「3人称単数」とし、「having」の活用属性2は「動名詞」とする。

6.4.4 その他

- ① 「持つ」という意味の動詞「have」が、その意味を持ちながら助動詞的に使われている場合は、「have動詞」として扱う（イギリス英語に多い使われ方）。

② 「have to」について

「have to」が助動詞として働いている時、「have」は動詞としての「持つ」を意味していないので「have動詞」とする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
have	have	HAVE 動詞	現在	なし
to	to	TO	なし	なし

③ 「had better」について

この場合「had」は、「have」の過去形ではなく独立のエントリー（標準表現＝「had」）として扱う。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
had	had	HAVE 動詞	現在	なし
better	well	副詞	比較級	なし

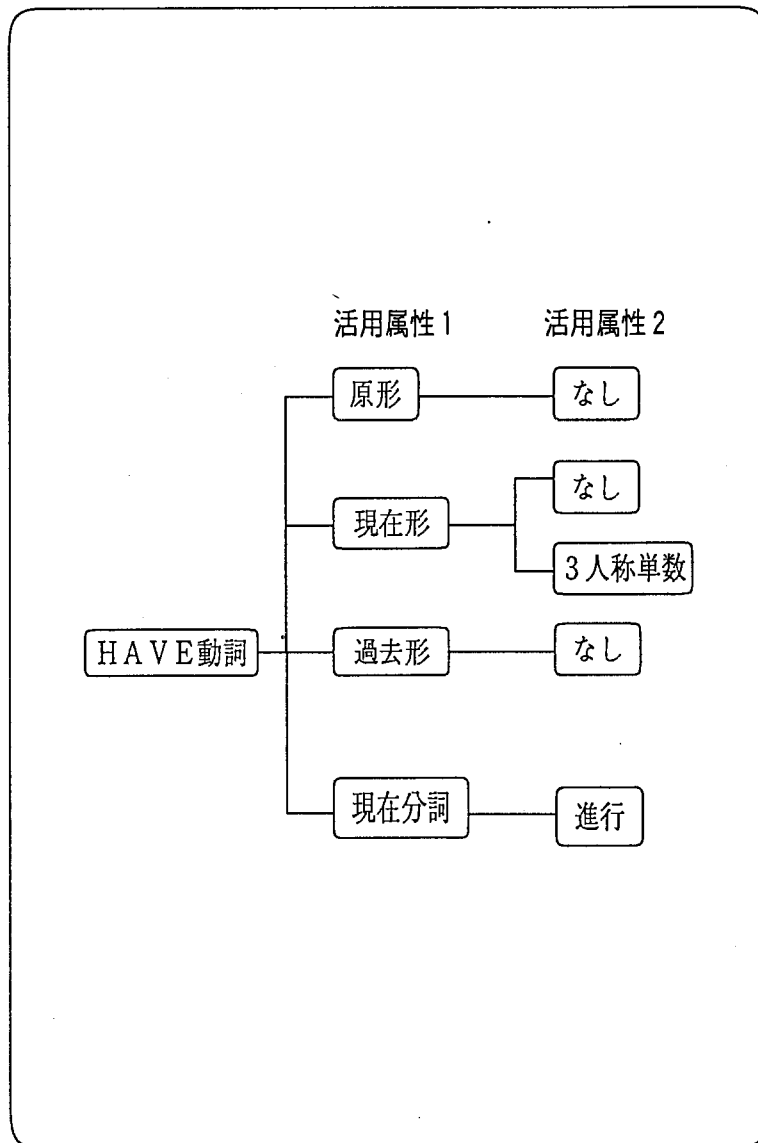


図 7: HAVE動詞の活用属性パターン

7 形容詞

7.1 形容詞

一般に1語で名詞を修飾する形容詞を構成する語を形容詞とする。また、形容詞の後に続く名詞が省略されている場合も形容詞として認める。

*数量形容詞は数量詞として扱うのでここでは形容詞としては認めない。

7.1.1 標準表現の復元

- ◆ 「比較級」、「最上級」の形容詞の標準表現は「原級」とする。
- ◆ 「比較級」、「最上級」以外の形容詞の標準表現は「出現表現」と同じとする。
- ◆ 「比較級」、「最上級」において、「原級」が2つ以上存在するものについては以下のようにする。

比較級・最上級の標準表現の復元					
形容詞			副詞		
原級	比較級	最上級	原級	比較級	最上級
good	better	best	well	better	best
bad	worse	worst	badly	worse	worst

7.1.2 活用属性1

形容詞の活用属性1は「比較級」、「最上級」、「その他」のみとする。それ以外の活用属性1は認めない。

7.1.3 活用属性2

形容詞の活用属性2は「なし」とする。それ以外の活用属性2は認めない。

7.1.4 その他

- ① 2個以上の形容詞が連続して現れている場合、先の形容詞は後に続く形容詞を修飾していると考えて「副詞」とする。
- ② 「l a t t e r」、「l a s t」の記述

「the latter option」の「latter」は、「late」の比較級とせず独立した単語とし以下のように記述する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
latter	latter	形容詞	その他	なし

「last time」の「last」は、「late」の最上級ではなく独立した単語となるので以下の
ように記述する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
last	last	形容詞	その他	なし

③ 「No. 3」について

「No.」の出現表現と標準表現は同じとし、品詞は「形容詞」活用属性は、「その他
なし」とする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
No.	No.	形容詞	その他	なし

「number 3」も同様に扱うこととする。

④ 「all right」や、文末の「right」について

「all right」や文末に付加疑問的に用いる場合の「right」の品詞は「形容詞」とする。

◇ all right

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
all	all	副詞	その他	なし
right	right	形容詞	その他	なし

◇ Now, you hate me, right?

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
right	right	形容詞	その他	なし

⑤ 「the rich」等のヘッドレスの名詞句に関して

形容詞の前に「the」が付いて名詞として働く場合があるが、このときの品詞は「形容詞」とする。

7.2 数形容詞

数形容詞とは、数詞や序数詞が後に続く名詞にかかって、形容詞的に働く場合、これを数形容詞とする。

7.2.1 標準表現の復元

- ◆ 数詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 序数詞の標準表現は以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
twenty-first	21st	数名詞	なし	なし
twenty-first	21st	数形容詞	なし	なし

7.2.2 活用属性1

数形容詞の活用属性1は「なし」のみとする。それ以外の活用属性1は認めない。

7.2.3 活用属性2

数形容詞の活用属性2は「なし」のみとする。それ以外の活用属性2は認めない。

7.2.4 その他

① 複合の数形容詞

ハイフンを用いた「a 5.5-by-4 sq. cm photo」のような一かたまりの数字表現で「5.5-by-4」は、数形容詞とする。

② 「million」は以下のように記述する。

◇ ten million questions

出現表現	標準表現	品詞
ten	ten	数形容詞
million	million	数形容詞
questions	question	名詞

◇ a million questions

出現表現	標準表現	品詞
a	a	限定詞
million	million	数形容詞
questions	question	名詞

◇ a million and a half? 数名詞の例

出現表現	標準表現	品詞
a	a	限定詞
million	million	数名詞
and	and	等位接統詞
a	a	限定詞
half	half	名詞

7.3 疑問形容詞

「what」、「which」が以下のように形容詞的に働いている場合、これを疑問形容詞とする。

- What date is the deadline?
- What kind of information would you like?
- Which hotel will be the closest to the center of the city?
- Which day are you going to accept this application?

7.3.1 標準表現の復元

- ◆ 疑問形容詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は、小文字になおす。

7.3.2 活用属性 1

疑問形容詞 1 の活用属性は「なし」とする。

7.3.3 活用属性 2

疑問形容詞 2 の活用属性は「なし」とする。

7.4 関係形容詞

「what」、や「which」が以下のような用法で使われている場合、これを関係形容詞とする。

- what
 - I will make a bank transfer through the bank stipulated below in what month and on what day.
 - Please let us know what equipment you would like to use at that time.
- which (～, 前置詞 which 名詞～)
 - I am a member of an academic society which will be obliged to attend the Conference as a general participant, in which case, I find the registration fee very expensive.
 - I would like to have 2 days, during which time I would see if I can arrange something so that you would get ull reservations.

7.4.1 標準表現の復元

- ◆ 関係形容詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は小文字になおす。

7.4.2 活用属性 1

関係形容詞の活用属性 1 は「なし」とする。

7.4.3 活用属性 2

関係形容詞の活用属性 2 は「なし」とする。

7.5 数量詞

以下に挙げる単語や、それに類する語が形容詞的に働いている場合、その単語は数量詞とする。

all	both	half	any	each	either
enough	every	neither	no	some	many
several	much	more	most	little	less
least	few	fewer	fewest		

(一般に数量形容詞と呼ばれる場合もあるが、ここでは数量詞と呼ぶ)

7.5.1 標準表現の復元

数量詞の標準表現は基本的には出現表現と同じとする。ただし、「more」、「fewer」、「fewest」などのようなものに関しては以下のように標準表現をつける。

出現表現	標準表現	備考
more	many	後に続く名詞が countable な名詞である場合。
more	much	後に続く名詞が uncountable な名詞である場合。
fewer	few	—
fewset	few	—

7.5.2 活用属性 1

数量詞の活用属性 1 は「なし」とする。

7.5.3 活用属性 2

数量詞の活用属性 2 は「なし」とする。

7.5.4 その他

① 数量詞と副詞の区別。(形容詞は存在しない)

数量詞と副詞の品詞の区別については以下のようにする。

- 単語 A + 「名詞」 (単語 A → 数量詞)
- 単語 B + 「形容詞/数量詞」 (単語 B → 副詞)

② 数量詞が連続する場合、後続の数量詞にかかっているものは、「副詞」とする。

◇ ...a few more speakers...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
a	a	限定詞	なし	なし
few	few	副詞	その他	なし
more	more	数量詞	なし	なし
speakers	speaker	名詞	その他	複数

◇ ...a little more information...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
a	a	限定詞	なし	なし
little	little	副詞	なし	なし
more	more	数量詞	なし	なし
information	information	名詞	その他	その他

③ 「all kinds of」について。
「all kinds of」の「all」の品詞は「数量詞」とする。

④ 「no + 名詞」の「no」は「数量詞」とする。

- no problem
- no money
- no time

「no more」の「no」は、「more」が名詞ではないので、副詞となる。

8 限定詞

8.1 限定詞

定冠詞「the」、不定冠詞「a an」また、名前の前につく「Dr.」、
「Mr.」、「Mrs.」、「Prof.」等を限定詞とする。ただし、固有名詞複合語に含まれる「the」は固有名詞とし、「my」、「your」、「his」、「our」などは代名詞とする。

8.1.1 標準表現の復元

- ◆ 「a,an」、「the」の標準表現は出現表現と同じとする。ただし、大文字始まりの場合は小文字になおす。
- ◆ 限定詞の標準表現は基本的には出現表現と同じだが、「Dr.」「Doctor」「Prof.」「Professor」「Mr.」「Mrs.」などの標準表現が名前の前に付いている時にはフルスペルで記述することなく、例外的に短縮形を優先して標準表現とする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
Professor	Prof.	限定詞	なし	なし
Prof.	Prof.	限定詞	なし	なし
Mr.	Mr.	限定詞	なし	なし
Mrs.	Mrs.	限定詞	なし	なし

8.1.2 活用属性1

限定詞の活用属性1は「なし」とする。

8.1.3 活用属性2

限定詞の活用属性2は「なし」とする。

8.1.4 その他

- ① 以下の名詞修飾語は、プログレッシブ辞書で形容詞と記述されており、限定詞とはせず「形容詞」とする。

◇ that

◇ this

◇ those

◇ these

◇ other

◇ another

- ② 「a」「～につき」という意味の「a」の品詞は、「限定詞」とする。（「前置詞」とはしない）

9 副詞

9.1 副詞

1 語で、かつ以下のような使い方をする場合の単語を副詞とする。

- 動詞を修飾する場合。
- 形容詞を修飾する場合。
- 他の副詞（句）を修飾する場合。
- 数量詞を修飾する場合。

9.1.1 標準表現の復元

- ◆ 比較級、最上級の副詞の標準表現は「原級」とする。それ以外の副詞のは標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は小文字になおす。

9.1.2 活用属性 1

比較級の副詞の活用属性 1 は「比較級」とし、最上級の副詞活用属性 1 は「最上級」とする。それ以外の副詞の活用属性 1 は「その他」とする。

9.1.3 活用属性 2

副詞の活用属性 2 はすべて「なし」とする。

9.1.4 その他

- ① 「please」
「please」が「どうぞ」「すみませんが」「恐れ入りますが」などのように副詞的な意味合いで用いられている場合の品詞を「副詞」とする。
- ② 「so forth」

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
so	so	副詞	その他	なし
forth	forth	副詞	その他	なし

- ③ 文頭の「then」も「副詞」とする。
- ④ 「about three minutes」の「about」や「around 3 o'clock」の「around」は、「副詞」とする。

⑤ 以下の「in between」の「in」と「between」を共に副詞とする。

◇ At the end of April with a weekend in between for 5 or 6 nights.

⑥ 「l a t e r」の記述に関して

「later」の記述に関して、辞書には、「late」の比較級と書かれているが、下記の例文が示すように、比較級の意味はすでになく、独立した語となっている場合がある。その場合は、比較級とは扱わない。

◇ See you later.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
later	later	副詞	その他	なし

9.2 疑問副詞

疑問詞「when」、「where」、「why」、「how」が疑問文の文頭に現れている場合、これを疑問副詞とする。ただし、「when」、「where」、が以下のような文中で先行詞無しで間接疑問の形で現れている時は疑問副詞として認める。「why」、「how」は先行詞なしで間接疑問の形で現れていても、「why = the reason why」、「how = the way how」となるので、関係副詞とし、疑問副詞とは認めない。

9.2.1 標準表現の復元

疑問副詞の標準表現は出現表現と同じとする。ただし、大文字は小文字に置き替える。

9.2.2 活用属性 1

疑問副詞の活用属性 1 は「なし」とする。

9.2.3 活用属性 2

疑問副詞の活用属性 2 は「なし」とする。

9.2.4 その他

① wh 語 + to 不定詞

- ◇ 「where to go」「how to do」「when to do」の wh 語は「疑問副詞」とする。
- ◇ 「What about going to the library?」などの「～はどう？」の「what」は、「疑問副詞」とする。
- ◇ 「This is how the fee is determined.」の「how」は、「関係副詞」とする。

9.3 関係副詞

「when」、「where」「why」、「how」が以下のような用法で使われている場合、これを関係副詞とする。

- 「when」、「where」が、先行詞と形容詞節を結びつける働きをしている場合。
- 「how」が方法を現している場合及び、「why」が理由を現している場合、先行詞の有る無しに関わらずこれを関係副詞とする。

9.3.1 標準表現の復元

- ◆ 関係副詞の標準表現は出現表現と同じとする。

9.3.2 活用属性 1

関係副詞の活用属性 1 は「なし」とする。

9.3.3 活用属性 2

関係副詞の活用属性 2 は「なし」とする。

9.3.4 その他

- ① 「whereby」が疑問の意味を持たず、「それによって」の意味を持っている場合、関係副詞として認める。
- ② 「wherever」が「～するどこでも」「～するどのような条件でも」を意味する場合、関係副詞として認める。

10 接続詞

10.1 等位接続詞

「and」、「or」、「but」、「for」、「so」などが、対等で同じ働きをする単語や節（または文）を結び付けている場合、これを等位接続詞とする。

10.1.1 標準表現の復元

- ◆ 等位接続詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は、小文字になおす。

10.1.2 活用属性1

等位接続詞の活用属性1は「なし」とする。

10.1.3 活用属性2

等位接続詞の活用属性2は「なし」とする。

10.1.4 その他

- ① 「also」が文中で文と文をつなぐ働きをする場合は「等位接続詞」とする。ただし、文頭で「また」という意味の場合は「副詞」とする。
- ② 「so」が「...,so...」の形で前文を受けて、次の文へとつながっていく時の「so」は「等位接続詞」とする。
 - ◇ Mr. Farhad will be arranging the details about the summary, so you will hear from him in the next week, I believe.
- ③ 「however」は「but」と同じく等位接続詞とする。
但し、以下の「however」の用法の場合は、副詞として扱う。
 - ◇ However late you are, be sure to phone me.
- ④ 「not only it is expensive, but also it is unefficient」

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
not	not	否定詞	なし	なし
only	only	副詞	その他	なし
but	but	等位接続詞	なし	なし
also	also	副詞	その他	なし

- ⑤ 「either」「both」
「either A or B」の「either」や「both A and B」の「both」の品詞は、「等位接続詞」とする。
- ⑥ 文頭で後ろにコンマを伴い、前の文を受けて「また」という意味で使われる「also」は、「等位接続詞」とする。以下に例を示す。
- ◇ Also, there is greater risk of accidents. (等位接続詞)
 - ◇ He is a doctor and also a novelist. (副詞)

10.2 副詞節従属接続詞

副詞節を導く接続詞を副詞節従属接続詞とする。ただし、2語以上の語から構成される群接続詞や相関接続詞と呼ばれるものは個々の構成語毎に分割してしまうので、この中には入れない。

10.2.1 標準表現の復元

- ◆ 副詞節従属接続詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は小文字になおす。

10.2.2 活用属性1

副詞節従属接続詞の活用属性1は「なし」とする。

10.2.3 活用属性2

副詞節従属接続詞の活用属性2は「なし」とする。

10.2.4 その他

- ① 「if」、「because」、「after」、「as」、「though」、「before」、が副詞的従属節を導く時は「副詞節従属接続詞」とする。
- ② 「...so (that) ...」の形の文は「so」も「that」も副詞節従属接続詞とする。また、「that」が省略されていても「so」は副詞節従属接続詞とする。
- ③ 「whether」と「if」が「～かどうか」という意味で使われ、節や不定詞が続く場合は、「名詞節従属接続詞」とする。
 - ◇ Whether or not I can participate is up in the air.
 - ◇ You must decide whether to go or stay.
 - ◇ Whether he is chairman or not, he deserves to be criticized. ただし、「～であろうとなかろうと」という意味の時は、「副詞節従属接続詞」とする。

10.3 名詞節従属接続詞

名詞節を導く接続詞を名詞節従属接続詞とする。代表的なものとしては「that」、「if」、「whether」などがある。ただし、「if」、「whether」は「～かどうか」という意味の場合のみとする。また、疑問詞が名詞節を導いている場合はその疑問詞は疑問代名詞とし、名詞節従属接続詞とは認めない。

10.3.1 標準表現の復元

- ◆ 名詞節従属接続詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は、小文字になおす。

10.3.2 活用属性 1

名詞節従属接続詞の活用属性 1 は「なし」とする。

10.3.3 活用属性 2

名詞節従属接続詞の活用属性 2 は「なし」とする。

10.3.4 その他

① 同格となる節を導く名詞節従属接続詞

「the fact that John killed himself」などの「that」は、「名詞節従属接続詞」とする。

② 名詞節従属接続詞の「if」

「if」で導かれる節をとる「it」は仮主語の IT とし、「if」を名詞節従属接続詞とし以下のように記述する。

◇ It would be better if you bring a long-sleeved blouse and such.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
it	it	仮主語	なし	なし
if	if	名詞節従属接続詞	なし	なし

11 その他

11.1 仮主語

「it」が特定の物事を指さずに、文や節の主語として表われる時、これを仮主語とする。

11.1.1 標準表現の復元

◆ 仮主語の標準表現は「it」とする。

11.1.2 活用属性 1

活用属性における活用属性 1 はすべて「なし」とする。それ以外の活用属性 1 は認めない。

11.1.3 活用属性 2

活用属性における活用属性 2 はすべて「なし」とする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

11.1.4 その他

① 仮主語の I T になりうる構文形は、以下の通りとする。

It... to	It's possible to read the book in a day.
It..that	It's possible that he made such a mistake.
It... if	It would be better if you bring a long-sleeved blouse and such.
It.. ing	It makes me nervous thinking of ...

11.2 T H E R E

「there」が「～がある」を意味する場合、これを「T H E R E」とする。「there」が場所や方向を現している場合は、副詞とし、「T H E R E」を認めない。

11.2.1 標準表現の復元

- ◆ T H E R Eの活用属性は「there」とする。

11.2.2 活用属性 1

T H E R Eの活用属性 1 は「なし」とする。

11.2.3 活用属性 2

T H E R Eの活用属性 2 は「なし」とする。

11.2.4 その他

- ① 「there」以外に存在を示す「here」も「there」と同様に扱う。

11.3 否定詞

ここでの否定詞は「not」のみ認める。

11.3.1 標準表現の復元

否定詞の活用属性は出現表現が「Not」、「n't」、「not」どの場合でも標準表現は「not」とする。

11.3.2 活用属性 1

否定詞の活用属性 1 は「なし」とする。

11.3.3 活用属性 2

否定詞の活用属性 2 は「なし」とする。

11.3.4 その他

① 否定詞の記述例

◇ I didn't like him.

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
did	do	助動詞	過去形	なし
n't	not	否定詞	なし	なし

◇ not at all

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
not	not	否定詞	なし	なし
at	at	前置詞	なし	なし
all	all	代名詞	目的格	複数

11.4 前置詞

一般に前置詞と呼ばれるものを対象とする。ただし、固有名詞複合語の中に含まれる場合は、固有名詞とし、前置詞とはしない。

11.4.1 標準表現の復元

- ◆ 前置詞の活用属性は出現表現と同じとする。
- ◆ 大文字始まりの場合は、小文字になおす。

11.4.2 活用属性 1

前置詞の活用属性 1 は「なし」とする。

11.4.3 活用属性 2

前置詞の活用属性 2 は「なし」とする。

11.4.4 その他

- ① 「...transfer the cost including our postal charges...」の「including」は、「前置詞」とする。
- ② 「onto」などが、「on」と「to」に分かれて出てきたら、一つの前置詞なので一つにまとめる。
 - ◇ We will get right onto it.
- ③ 以下の表現中の語は、両方とも「前置詞」「前置詞」とする。
 - ◇ 「as for the registration fee,」の「as for」
 - ◇ 「make specific request as to the types of equipment」の「as to」
 - ◇ 「except for John and Mary」の「except for」

11.5 TO不定詞

「t o + 動詞の原形」で不定詞を構成する「t o」を「TO不定詞のTO」とする。
それ以外のt oは前置詞とする。

11.5.1 標準表現の復元

- ◆ TO不定詞のTOの標準表現は出現表現と同じとする。

11.5.2 活用属性1

TO不定詞のTOの活用属性1は「なし」とする。

11.5.3 活用属性2

TO不定詞のTOの活用属性2は「なし」とする。

11.6 間投詞

以下のような単語は文頭や単独で、「あいづち」「感動」「感嘆」「応答」「呼びかけ」として使われる場合、「間投詞」として扱う。

yes	no	sure	gee	well
hello	oh	bye-bye	O.K.	thanks
bye	good-bye			

11.6.1 標準表現の復元

- ◆ 間投詞の標準表現は出現表現と同じとする。
- ◆ 「O.K.」、「Ok」、「Okay」、「o.k」などの標準表現は「okay」とする。

11.6.2 活用属性 1

間投詞の活用属性 1 は「なし」とする。

11.6.3 活用属性 2

間投詞の活用属性 2 は「なし」とする。

11.6.4 その他

以下の語は間投詞的に使われていても「間投詞」とはせずに、辞書から適切な品詞を選んで記述する。

- ① 「Alright」
「It is alright」の省略と考える「形容詞」とする。
- ② 単独の「Certainly」
「Certainly I will do that.」などの省略と考える「副詞」とする。
- ③ 以下のような語は、文頭で間投詞的に使われている場合（主として単独で使われる）、「間投詞」として扱う。

hmm	wow	ah	gee	congratulation(s)
say	uh	umm	yeah	(「おめでとう!」)

- ④ ハイフンで連結された「Good-bye」、「good-bye」、「bye-bye」は、一つの単語として扱う。品詞は「間投詞」。活用属性は、「なし_なし」に統一する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
good-bye	good-bye	間投詞	なし	なし
bye-bye	bye-bye	間投詞	なし	なし

11.7 文中の終止符

改行直前の終止符 (?!) 以外の終止符を文中の終止符とする。

11.7.1 標準表現の復元

- ◆ 文中の終止符の標準表現は出現表現と同じとする。

11.7.2 活用属性 1

文中の終止符の活用属性 1 は「なし」とする。

11.7.3 活用属性 2

文中の終止符の活用属性 2 は「なし」とする。

11.8 コンマ

文中に存在する「,」は全てコンマとする。例外は認めない。

11.8.1 標準表現の復元

コンマの標準表現は「,」とする。

11.8.2 活用属性 1

コンマの活用属性 1 は「なし」とする。それ以外の活用属性 1 は認めない。

11.8.3 活用属性 2

コンマの活用属性 2 は「なし」とする。それ以外の活用属性 2 は認めない。

11.9 終止符

文末の終止符の「?!」を終止符とする。

11.9.1 標準表現の復元

- ◆ 終止符の標準表現は出現表現と同じとする。

11.9.2 活用属性1

終止符の活用属性1は「なし」とする。

11.9.3 活用属性2

終止符の活用属性2は「なし」とする。

11.9.4 その他

- ① 文末にピリオド付の略語がきたとき、略語にはピリオドをつけておく。又その次の単語は、「ピリオド (e n d) 」になる。もしピリオドが無い場合には、「ピリオド (e n d) 」を挿入する。

◇ I'll be there at 6 p.m..

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
6	6	数名詞	なし	なし
p.m.	p.m.	副詞	その他	なし
.	.	終止符	なし	なし

- ② 「?!」のように「?」と「!」がくっついて出てきたら「記号」とする。もし各々が独立して出現した場合「終止符」とする（文末で）。

11.10 記号

括弧類や、ポーズの役割をする「...」や、「;」などを記号とする。

11.10.1 標準表現の復元

記号の標準表現は出現表現と同じとする。

11.10.2 活用属性1

記号の活用属性1は「なし」とする。

11.10.3 活用属性2

記号の活用属性2は「なし」とする。

11.10.4 その他

- ① 挿入句などの直前に現れるダッシュは、ふたつ以上連続した場合、分割せずに一まとめにして記述する。

◇ We sent Announcement using members lists of sponsors - - Information Processing...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
--	--	記号	なし	なし

- ② 「Hmm...that's difficult.」などで躊躇などを表す「...」は、「記号」とし、3つまとめて記述する。

- ③ アスタリスク「*」が続く文字とくっついて現れたら、その続く語は、「*」を取った形を標準表現として記述し、品詞は後に続く語の品詞とする。もしばらばらに現れたら、別々に処理し「*」は「記号」として処理する。

◇ Do you mean I sould send it as soon as possible?

◇ Do:do : 助動詞: 現在形: なし

- ④ クォーテーションマークは、それに囲まれている品詞、語数に関係なく、「記号」とする。

◇ ...under * "Cancellation"...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
*	*	名詞	その他	単数
”	”	記号	なし	なし
Cancellation	Cancellation	固有名詞	その他	その他
”	”	記号	なし	なし

- ⑤ 「?!」のように「?」と「!」がくっついて出てきたら「記号」とする。もし各々が独立して出現した場合「終止符」とする（文末で）。
- ⑥ コロン（:）の品詞は「記号」とする。

11.11 その他

テキスト上で解析することのできなかつた語及び、品詞の特定は可能だがタイプミスとなっているものをその他とする。

11.11.1 標準表現の復元

その他の標準表現は出現表現と同じとする。

11.11.2 活用属性1

その他の活用属性1は「なし」とする。

11.11.3 活用属性2

その他の活用属性2は「なし」とする。

11.11.4 その他

① スペルミスの場合

スペルミスの場合は、品詞を「その他」にし、出現表現=標準表現とし、属性を「なし」「なし」として記述し、コメント欄に正しいスペルを入力する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2	コメント欄
infomation	infomation	その他	なし	なし	information

② 文法的なミスがある場合

該当単語の品詞を「その他」とせずにその語の品詞及び属性値をミスのまま記入しコメント欄に正しい語を記入する。

◇ It take time to ...

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2	コメント欄
take	take	動詞	現在形	なし	takes

③ 不必要な語が出てきた場合

削除はせずそのまま記述し、コメント欄に「必要なし」と記入する。

④ 必要と思われる語が抜けている場合

抜けていると思われる語の後に続く語のコメント欄に、その旨を書き入れる。

◇ ...ask you * write your abstract...

* の所に'to' がぬけていて、動詞'write' はここでは原形だと思われる。

(* は便宜のため挿入)

write	write	動詞	原形	なし	write の前に to が必要
-------	-------	----	----	----	------------------

⑤ スペースがないために語がくっついて出てきた時

語と語の間のスペースが入っていないというデータベース入力ミスのために、出現表現で2つの語（または記号）がくっついて出て来ることがある。

◇ Well,we can decide it.

上の例では、コンマの後にスペースがないために出現表現で"we"がコンマとくっついて「,we」のように出てくる。その場合は、2つに分けて処理する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
,	,	コンマ	なし	なし
we	we	代名詞	主格	一人称複数

11.12 個別要件

① first of all

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
first	first	数名詞	なし	なし
of	of	前置詞	なし	なし
all	all	代名詞	目的格	複数

② not at all

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
not	not	否定詞	なし	なし
at	at	前置詞	なし	なし
all	all	代名詞	目的格	複数

③ and so on

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
and	and	等位接続詞	なし	なし
so	so	副詞	その他	なし
on	on	副詞	その他	なし

④ according to

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
according	according	副詞	その他	なし
to	to	前置詞	なし	なし

⑤ 「The prices are a little too expensive.」の「a little」は

出現表現	標準表現	品詞	活用属性 1	活用属性 2
a	a	限定詞	なし	なし
little	little	副詞	その他	なし

⑥ 「not onl it is expensive」、 「 but also it is unefficient 」

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
not	not	否定詞	なし	なし
onl	onl	副詞	その他	なし
but	but	等位接続詞	なし	なし
also	also	副詞	その他	なし

- ⑦ 「It is by far the most expensive application fee.」の「by far」は以下のようにする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
by	by	前置詞	なし	なし
far	far	副詞	その他	なし

- ⑧ 強調されて語がすべて大文字で書かれている場合、標準表現は小文字に直す。但し、固有名詞はそのままとする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
STILL	still	副詞	その他	なし
YAMAMOTO	YAMAMOTO	固有名詞	その他	単数

- ⑨ 「his/her」とくっついて出てきたら、「his」「/」「her」と分けて記述する。
 ⑩ 「Suffice it to say」と言う決まり文句は、「It will suffice to say」を变形したものとして扱う。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
Suffice	suffice	動詞	原形	なし
it	it	仮主語	なし	なし
to	to	TO	なし	なし
sa	sa	動詞	原形	なし

- ⑪ 「U.C.」「M.I.T.」のようにピリオドのついた頭字語は、ばらばらに出てくることが多いので、そのつど一つにまとめる。
 ⑫ How about について

「How about」の「about」の品詞は、「前置詞」とする。

◇ How about some coffee?

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
How	how	疑問副詞	なし	なし
about	about	前置詞	なし	なし

⑬ 「How much + 名詞」について

「How much」の「much」の品詞は、「数量詞」とする。それ以外の「How much」の「much」の品詞は、「副詞」とする。

◇ How much is it?

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
How	how	疑問副詞	なし	なし
much	much	副詞	なし	なし

◇ such (...) as ... / the same (...) as

「such stories as he tells」のように「such と as」が離れている場合の「as」は、文脈により「関係代名詞_目的格」とする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
such	such	形容詞	その他	なし
as	as	関係代名詞	目的格	なし

◇ the same as the others

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
same	same	形容詞	その他	なし
as	as	関係代名詞	目的格	なし

⑭ 「such as oranges, lemons」のように「such as」が連続している場合は、以下の記述とする。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
such	such	副詞	その他	なし
as	as	前置詞	なし	なし

⑮ 「as long as」、「as soon as」、「as well」は全体を一つの単語とするのではなく各々に品詞を割当て以下のように記述する。

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
as	as	副詞	その他	なし
long	long	副詞	その他	なし
as	as	副詞節従属接続詞	なし	なし

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
as	as	副詞	その他	なし
soon	soon	副詞	その他	なし
as	as	副詞節従属接続詞	なし	なし

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
as	as	副詞	その他	なし
well	well	副詞	その他	なし

⑯ 「“C” class」について

「“C” class」のCの品詞は、「固有名詞」とし「C class」のCは、「名詞」とする。

⑰ than について

「than」は、「接続詞」または「前置詞」の場合があるが前後関係より明らかに前置詞ではない場合「副詞従属接続詞」とする。

◇ drive at more than six miles an hour (前置詞)

◇ He is older than me. (前置詞)

副詞従属接続詞 「He is three years older than I (am).」

⑱ 数字について

数字がハイフンで連結されている場合、電話番号を除いて連結されたものは各々の要素に分割し個別に記述する。

◇ 10-15-20 住所の番地例

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
10	10	数名詞	なし	なし
-	-	記号	なし	なし
15	15	数名詞	なし	なし
-	-	記号	なし	なし
20	20	数名詞	なし	なし

◇ 07435-3-5521 (電話番号例)

出現表現	標準表現	品詞	活用属性1	活用属性2
07435-3-5521	07435-3-5521	数名詞	なし	なし

⑲ 「so」の品詞決定

「so」が文頭にあるとき、「so」の後に、があっても無くても「副詞」とする。

- ◇ I think our conference is related to our group and some members of our group might be interested in our conference.

So I would like to send invitation cards to the members.

Well, that's easy enough.

So, Ill see ou on the first day of the conference.

「so」が文中で2つの節を結び、「so」の前に、がある時は「等位接続詞」とする。

- ◇ Mr. Farhad will be arranging the details about the summary, so you will hear from him in the next week, I believe.

「so」が「一するよう」に」という目的を表す「so that」の「so」のとき（「that」が省略されているときも）は、「so」も「that」も「副詞節従属接続詞」とする。

- ◇ I packed him a little food so that he wouldn't get hungry.
- ◇ Check the list so there will be no mistakes.

上記以外の「so」は、副詞とする。

- ◇ I didn't like it so I refused it.
（「so」の前にコンマが省略されているとも考えられるが、この場合も基準に従って副詞）
- ◇ I don't think so.

12 付録

表 6 の品詞体系にもとづき品詞属性を付与する。

出現形式の屈折情報を単語の活用属性として付与する。活用属性は、二バイトで表現される。活用属性の値を表 7、表 8 に示す。

表 6: 品詞体系

記号 1	記号 2	品詞	コメント
noun	10	名詞	
nnun	11	数名詞	
prop	12	代名詞	
qprop	13	疑問代名詞	
rpron	14	関係代名詞	
it	15	仮主語	
propn	16	固有名詞	追加
spron	17	再帰代名詞	追加
verb	20	動詞	
aux	21	助動詞	
be	22	BE 動詞	
have	23	HAVE 動詞	
adj	30	形容詞	
anum	31	数形容詞	
qadj	32	疑問形容詞	
radj	33	関係形容詞	
det	34	限定詞	
quant	35	数量詞	追加
adv	40	副詞	
qadv	41	疑問副詞	
radv	42	関係副詞	
there	43	THERE	
not	44	否定詞	
prep	50	前置詞	
to	51	TO 不定詞の TO	
conj	60	等位接続詞	
aconj	61	副詞節従属接続詞	
nconj	62	名詞節従属接続詞	
int	70	間投詞	
punc	80	文中の終止符	
comma	81	コンマ	
slash	82	スラッシュ	
end	83	終止符	
syml	84	記号	追加
other	85	その他	追加

表 7: 活用属性 1

第一バイト			
原形	A	最上級	G
現在形	B	主格	H
過去形	C	目的格	I
過去分詞形	D	所有格	J
現在分詞形	E	所有代名詞形	K
比較級	F	その他	Z
		なし	-

表 8: 活用属性 2

第二バイト			
一人称 単数	a	完了	A
一人称 複数	i	形容	B
一人称 その他	q	受動	C
二人称 単数	b	現在分詞	D
二人称 複数	j	進行	E
二人称 その他	r	動名詞	F
三人称 単数	c	なし	-
三人称 複数	k		
三人称 その他	s		
単数	d		
複数	l		
その他	t		

索引

- body, 21
- one, 21
- self, 26
- selves, 26
- thing, 21

- あいづち, 65
- 応答, 65
- 会議名, 15
- 加算名詞, 10
- 感嘆, 65
- 感動, 65
- 群接続詞, 58
- 群動詞, 29
- 原形不定詞, 27
- 最上級, 41, 52
- 指示代名詞, 21
- 社名, 15
- 集合名詞, 10
- 所有代名詞, 21
- 序数詞, 20, 44
- 人名, 15
- 数量形容詞, 41
- 数量詞と副詞, 48
- 相関接続詞, 58
- 短縮形, 4
- 地名, 15
- 抽象名詞, 9
- ツアー名, 15
- 独立所有格, 13
- 2語以上の名詞連続, 11
- 人称代名詞, 21
- 比較級, 41, 52
- 不加算名詞, 10

- 複数語からなる固有名詞, 5
- 普通名詞, 10
- 不定代名詞, 21
- 物質名詞, 10
- 呼びかけ, 65

- ハイフンでつながれた造語, 5

- a, 50
- after, 58
- all, 21, 48
- all right, 42
- alright, 65
- also, 56
- am, 35
- an, 50
- and, 56
- another, 51
- any, 21, 48
- are, 35
- as, 25, 58

- be, 35
- be able to, 32
- be going to, 32
- because, 58
- been, 35
- before, 58
- being, 35
- both, 21, 48, 57
- but, 25, 56
- bye, 65
- bye-bye, 65

- can, 32
- can't, 7

could, 32
did, 32
do, 32
does, 32
Dr., 50

each, 21, 48
ehether, 58
either, 48, 57
enjoy, 28
enough, 48
every, 48
excuse me, 29

few, 48
fewer, 48
fewest, 48
for, 56

gee, 65
gonna, 30
good-bye, 65

half, 48
have, 38
have to, 32
hello, 65
herself, 26
himself, 26
his, 50
how, 54, 55
how to do, 24, 54
however, 56

if, 58, 59
is, 35
it, 60
itself, 26

latter, 41
least, 48
less, 48
let, 29
little, 48

many, 48
may, 32
might, 32
million, 44
mind, 28
more, 48
most, 48
Mr., 50
Mrs., 50
much, 48
must, 32
my, 50
myself, 26

n't, 62
neigther, 48
no, 48, 65
Not, 62
not, 62

O.K., 65
oh, 65
one, 21
or, 56
other, 51
ought to, 32
our, 50
ourselver, 26

please, 52
Prof., 50

right, 42

several, 48
shall, 32
should, 32
so, 56
so (that), 58
some, 21, 48
start, 28
sure, 65
sush, 21

thanks, 65
that, 21, 25, 51, 59
the, 50
themselves, 26
there, 61
these, 21, 51
this, 21, 51
those, 21, 51
though, 58
try, 28

wanna, 29
was, 35
well, 65
were, 35
what, 24, 25
what to do, 24
when, 54, 55
when to do, 24, 54
where, 54, 55
where to go, 24, 54
whereby, 55
wherever, 55
whether, 59
which, 24, 25
who, 24, 25
who to talk to, 24

whom, 24, 25
whose, 25
why, 54, 55
will, 32
won't, 7
would, 32

yes, 65
your, 50
yourself, 26